

関心に応じて計画を柔軟に修正しつつ展開した実践は、次のような成果を生み出していたと解釈できる。

- (1) 子どもの経験内容が多様であった。
- (2) 子どもの過去経験が生かされた。
- (3) 活動過程における経験の価値が重視された。
- (4) 担任教諭の創意工夫が生かされた。
- (5) 計画の副次的効果や潜在的カリキュラムの機能が自覚化された。

以上は、カリキュラムを教師主導で開発する時に生じる問題点を転換させる視点となるものである。

このように、子ども主体に展開されるプロジェクトの実践は、教師からの一方的な押し付けを排除することを始め、経験内容をせばめた画一的な実践、教師の創意工夫や専門性の発揮を拒むといった実態を改善する可能性をもった取り組みであった。

た。

こうした実践を保障、かつ生成していくためには、カリキュラム概念の見直しはもちろんのこと、それを作る過程の見直しも求められる。近年、カリキュラムの「開発」について、「プログラムの開発」を目的とすることなく、「プロジェクトの創造」を課題とする営みへと転換することが求められている。つまり、今後のカリキュラムづくりは「過程——産出モデル」を前提に「研究・開発・普及モデル」と呼ばれる開発様式を主とすることなく、「教師の専門家としての見識」の開発を中心課題とし、「実践・批評・開発モデル」へと転換することが必要となるわけである。このように、本研究はカリキュラムづくりをトップダウン型からボトムアップ型へと転換することの必要性を明らかにすることができた。

「子どもの“口頭詩”」を通して発達を促す ——言語の生活化へのアプローチ——

白梅学園大学 増田 修治

はじめに

「子どもたちを理解する」とか「子どもの発達を促す」という事がよく言われる。そのことの大切さに対しての異論はないであろう。しかし、実際に保育の現場を見た時に、その言葉の中身が吟味され、実践とつながった形で展開されていると言えるのだろうか。言葉と実践をしっかりとつなげていると言えるのだろうか。言葉だけが一人歩きし、実態が伴わないまま保育が進んでいないだろうか。

そう考えた私たちは、「子ども理解」「子どもの発達」という言葉そのものをしっかりとらえ直すと共に、保育実践とつなげて考える必要性を感じた。そのためには、保育実践の事実そのものを見るだけでなく、その裏側に潜む子どもの思いや願いをくみ取ることが言葉と保育実践をつなげてい

くことになる考えた。

1, 研究の目的

子どもの発達を促す保育実践のための手立てや、子どもの言葉を広げ・深めていくための声がけを考えることを通して、「子どもを丸ごととらえ、他者とつながることの楽しさを感じることの保育実践」のあり方を考えていく。

2, 研究方法

そうした議論を積み重ねていくためには、バラバラに実践していくだけではダメである。そのために、“口頭詩”という子どものつぶやきを拾うという方法を共有しながら、子ども観を深め・保育実践を深めていく作業をていねいにしていきながら、保育実践のあり方を考えていくという方法

をとることにした。

第一章 口頭詩学習会の始まりと、これまでの流れ

1, はじめに

東京都公立保育園研究会のA会長が、私の本を読んでくれたことが、この学習会をはじめたきっかけであった。その時のことをAさんは当初、こう書いている。

「小学校の子どもたちの詩が掲載された本「ユーモア詩」を読んだ私達は、そこに書かれた日々の子ども達のつぶやきに感銘するとともに、衝撃を受けました。私たちは、毎日子供たちのつぶやきを聞き日誌に書きとめたり、そのことをクラスだよりで知らせてはいるものの、つぶやきから子供の心の動きや育ちをじっくりと考えたことがなかったことに気づいたのです。過大な表現になることを恐れずに言いますと、私たち保育士は、日々の保育現場の中で、何気なく話している子どもたちの会話やつぶやきに秘められた心の動きや発達を見過ごしていました。本当にもったいないことをしていたなと反省せざるを得ませんでした。

現在、一般的にコミュニケーション能力の低下が指摘されています。親子間の会話もただ言葉が頭の上を通り過ぎているだけで、気持ちが通い合う会話になっていない、人と人の会話も同様なことがあります。特に、大人が子どもの言葉に耳を傾けることができない昨今のありようは、大人の何に問題があるのでしょうか、また、何を物語っているのでしょうか。そんなことも気になりました。

自分の話す言葉の意味を正確に伝えるためには、話したことを相手はどう受け止めたのか、その反応を見ながら次の言葉につなげることの繰り返しを行いながら、コミュニケーションをとらなければなりません。コミュニケーションをとることによって、イメージーションが広がり、人と心地よくなかわれていくことになり、そのことで理解が深まり相互に認め合う関係が築かれます。

今の時代だからこそ、子どもが語りたい、伝えたいことを沢山聞いてあげ、その中から子ども達の健全な発達を促す「言語環境と人が深く交わるための人間関係」の両者を構築することが大切ではないかと思わざるを得ませんでした。」

この思いを抱く人たちを中心として始めたのが「口頭詩学習会」の始まりであった。

2, 学習テーマ

はじめに話し合っていく中で決まったのが、下記の学習テーマであった。

保育実践『口頭詩と子どもの発達』

—— 口頭詩を通して保育の質を考える ——

そして、「目的と学び」は、次のように決まった。また、今実践のステップを振り返ると、(2)のようなステップをふんでいく中で、学習会が深化していったことが明らかになった。

(1) 目的と学び

保育者自身の変革

保育者が子どもの声の真の聴き手になる

- ・一つひとつのことはを吟味して書くことによって新しい発見が出来る。そして更なる発見を目指しながら学習する

実践と理論をつなげる作業を通して実践を捉えなおし、更なる新しい実践につなげる

- ・自分の目の前にいる子の事例を通してわかることこそ、真の実践者である。

こどもの発達

- ・一人ひとりの子どもの発達を丁寧に見ていき、発達を促しながら、こどものつぶやきを他者と共有し、他者を巻き込み（親、他の子供たち、保育者）広げていく。
- ・子どもも大人も、人と人とが繋がりがあうことが心地よいということを知り、遊びやさまざまな達成感を、その子の本当の心の奥底が出てくる言葉で表現する力を

もつこと

・人と人とがつながりあう力をもつこと

(2) 実践のステップについて

【第1ステップ】

『とにかく拾おう子どものことば』

まず、子ども達の会話を聞き逃さず書きとめた。

【第2ステップ】

『子どもの言葉のもつ意味を考える』

つばやきのことばから、その言葉に秘められた気持ちを探り、子どもの気持ちに共感することに努めることとした。次に書きとめた子どもの言葉の持つ意味を深く掘り下げた。

【第3ステップ】

『話をつなげる』

子どもの言葉を率直に聞き、その言葉を周りの子どもたちが、どのように受け取ったのか観察した。

【第4ステップ】

『保育士がどうことばをかけるか、どう言葉を返していくのか』

保育者として、子どもの言葉の持つ意味をいかに正しく解釈していくか、また、もっと豊かな解釈の仕方はなかったのかと自問自答しながら、子どもに対してその言葉がけでよかったのか、もっと違う言葉がけはなかったのかと反省をしながら学習を進めていった。

【第5ステップ】

『子どもの言葉を通して保育を考える』

子どもが不思議だなと思ったこと、感動したこと、言葉をキャッチし、次の保育につなげていくようにした。

3, 学習する中でサークルのメンバー確かに学んだこと

(1) 「文化のなかで育つということ」「保育とは何

か」を改めて学習した。

サークルのメンバーは、「日常生活における子どもたちの会話の中に、沢山の問題や生きた保育の教材が含まれていることを、大人が見逃しているということ、子どもの言葉に視点を置いて保育を考えたとき、子どもの見えない心の動きや個々の言葉のもつ意味やその子どものおかれた環境の違いを知ることができる。」ということがわかっていった。

たくさんの事例を検証していく中で、「あなたならこの場面でどんな言葉を言いますか?」「あなたならこれをどう読み取りますか?」「心を読み取るための言葉がけはどうしますか?」「友達との輪をつなげていくための言葉がけをどうしたらよいか?」「話題を膨らませていくための言葉がけをどうするのか?」といったことを、具体的な事例とつなげながら様々な角度で幅広く学習していくなかで、子どもの言葉への鋭さを磨くと同時に、その子どもの言葉への即応性と応答性を身につけていくことができた。

(2) 子どもに向き合う姿勢の大切さ

保育士の子どもに向き合う姿勢により、子どもの世界が広がることもあれば、逆もある。つまり、大人や友達の言葉が、子どもの本来もっている良さを失わせていくこともあれば、言葉の使い方一つで相手に夢を与えたり、失望感を与えたりと、様々な状況を招くことがある。

このようなことの積み重ねにより、言葉の伝え方、メッセージの送り方などについての的確なコツが身につけていった。

4, 進め方のポイント

人格の尊重、命の尊厳と簡単に言葉で言うが、自分自身が何気なく、さりげなく過ごしている日常保育の場や、保護者などとの関係の持ち方において、人格の尊重、命の尊厳ということを主軸において、保育実践しているかということを絶えず問うように進めていった。

『口頭詩』を学習したことの結論めいたことになるが、保育とは、人が人をどう見ていくか、人が人をどう大切に考えていくかということに尽きるということではないだろうか。

第二章 子どもの声が聴き取れるようになった

～全ての心（十四の心）を込めて、子どもの声を聴き取るということ～

1, 口頭詩から学んだこと（焼肉のニオイの報告を例にして）

保育士は指導計画に「子どもの気持ちに共感する」という言葉を使うことが多い。その共感するという意味が「子どもの心の声を聴き取るという事」であり、心の声を聴き取るということが「子どもの心を抱きしめる事」ということに繋がることだが、学習会を通して理解されていった。

Iさんがもってきた実践を例にして説明してみたい。

〈事例1〉3歳児男子

散歩の帰り道定食屋さんの前を通った時

子：「おとなの焼肉の匂いがするね」

保：「そうだね。お腹すいたね。早く保育園に帰って食事にしよう」

この時、このI保育士は「おとなの焼肉の匂い」という言葉の表現の面白さを伝えてくれた。そして、散歩の時には、子どもたちもお腹空いたんだなと思ったことと、給食の時間には間に合うように保育園に帰らなければいけないし「いいにおいだね。早く保育園に帰って食事しようね」といった会話が終わってしまったことを報告してくれた。

しかし、もし「おとなの焼肉の匂い」というこの言葉のおもしろさを他の子どもたちともしっかり共有し遊べる余裕がI保育士にあったならば、きっと対応が違っていただろう。

たとえば「おとなの焼肉の匂い」と表現した子どもの言葉に対して、次のように言葉を返して会話を広げられ深められたのではないだろうか。

「おとなの匂い」とはどんなイメージがある

のか？

「焼肉の匂い」は他にどんな匂いがするの？

食べ物で好きな匂いは何？

「子どもの匂い」はどんな匂い？

こうした～までの他にも、いろいろな方法で会話を広げられはらずである。そうすれば、他の子どもたちも楽しい会話を通して「匂い」「食べ物」などといった抽象的なイメージを具体的なイメージに膨らませながら食事の時間を迎えることができたのではないだろうか。そして、豊かな会話が展開されたはずである。この事例を通して、「子どもの心の声を聴く」という事がどう言うことなのか、学習会のメンバーに少しずつ理解されていった。

2, 「つぶやきと会話集」の発行

子どもの言葉を聴くことの意味を知ったI保育士は、「つぶやきと会話集」の通信を出すようになる。その「つぶやきと会話集」の事例を紹介しながら考察をしたいと思う。

〈事例2〉3歳男子 3歳児クラスに進級して

すぐ親子の会話から

母：「やまぶき組（3歳児）になったのに、
なんでおもらしをするの？」

子：「おちんちんは、まだあざみ組（2歳児）
だもん」

その会話を聞いていた私はしばらくしたある日

保：「どう、最近のおちんちんの調子は？」

子：「うん、行ったり、来たりしてるよ」

〈I保育士の考察〉

3歳児に進級した本人だが、まだおもらしが多い本人は「おちんちんはまだあざみ組の赤ちゃんだから、もう少し待ってあげてね」とおちんちんの気持ちを代弁していたのでしょう。本人がどう答えを出すのか考えて「どう、おちんちんの調子は？」と聞いてみたら「行ったり、来たりしてるよ」の答えの中に、「おちんちん

はゆっくり進級してるから心配しないで」と言
いたかったようです。

3歳児でも言葉の遊びを上手く使って表現で
きることを学んだ事例でした。

励まし方も言葉の遊びを大人が使うことで子
どもの気持ちも素直に表現できるようです。語彙
の豊富さも大切なことを学んだ事例でした。

事例や実践に対して、こうした考察を入れて
いくことにも、徐々に力を入れていった。

3. 幼い子どもの言い分を考える

どんなに幼い子どもであっても、それなりの言
い分があるのである。もちろん、自分勝手に大人
からしたら「何言ってるの!」と言いたくなる時
もあるに違いない。しかし、とりあえず子どもの
言い分を聞くという姿勢が大切だし、その姿勢を
持ち続けるべきではないだろうか。次の事例は、
M保育士の事例である。

〈事例4〉5歳児

・ある保育園の年長組の会話

A子:「あたし、先生になりたいな」

A子:「だって、好きに怒れるから」

保:「どんな時、怒りたくなるの?」

B男:「先生がドッチボールをさせてくれな
い時」

C男:「ドッチボールの時、お腹にボールが
当たって痛かったのに、先生が大丈夫!
と言った時すごくむかついちゃった」

保:「そうだったんだ、ごめんね」

A子:「眠くないのに、お昼寝の時、静かに
寝なさいと言われる時、自分が寝れば
いいのにと思う」

保:「ふう〜ん」

B男:「そうだよ、子どもだって怒っている
んだからね」

M保育士は、この話を5歳児に読んであげたと
ころ、共感するところがあるのか何度も読んで

と催促してきたそうである。そこで「どんな時、
先生に怒りたい」と聞いてみたそうである。す
ると、次のようなことが出てきたのである。

— 先生に怒っている事 — (5歳児)

- ・布団をかぶって寝ていると、「頭をだしなさい」
と言われるとき
- ・少しふざけた時に注意されるとムカツク
- ・「手を洗いなさい、うがいしなさい」と言われ
なくとも分っているのに、と言われるとき
- ・手を上げているのに、他の友達を当てる時
- ・地震の放送をもっと早くして欲しい...これは地
震が起きる前に教えて欲しいそうです(無理)
- ・三輪車で遊んでいる時に、「もう赤ちゃんじゃ
ないんだからやめなさい」といわれる時
- ・ホールで寝るときに、「静かに寝なさい」と言
われる時
- ・寝るときに、「早く行きなさい」と言われる時
- ・いつも、何か頼まれる時
- ・風呂敷を床に置いている時に、「早くたたみな
さい」と言われる時
- ・外に出る時、イスをそのままにするのか? 片付
けるのか? 解らない時
- ・遊びたいのに、やまぶきさんが降りて来て「危
ないからやめなさい」と言われる時
- ・お昼寝の時、おしっこに行きたいのに「後にし
なさい」と言われた時
- ・遊んでいる時に「もう、お部屋に入りなさい」
といわれた時
- ・けがをした時、「そのくらい大丈夫!」と言わ
れた時
- ・きな粉、あんこのお餅の時、あんこのお餅を減
らしてくれなかった時

〈M保育士の考察〉

「怒っている」事に共感した子どもたちは、次々
に日常思っていたことをはなしてくれました。
一番盛り上がった話し合いでした。

日常私たちが何気なく声を掛けていることに対

して、こんなにも想いがあったにかと深く反省しました。子どもたちの一言一言に「ごめんなさい」と頭を下げ続けました。

それでも、どうしてそういう言葉がけをしているのか、一応弁明させていただきました。

「怒っている」理由はどれも、子どもの気持ちを尊重して欲しい事なんだと改めて考えさせられました。一呼吸して、言葉を飲み込んで見守る事を子どもたちに話しました。

幼い子どもの言い分に改めて耳を傾ける必要性が、学習会の中で話し合われ、確認されていった。

4、お年寄りとの交流

お年寄りとの交流をした時のことである。「自分たちとどこが違うか？」と保育士が聞いたところ、次のようなことが出てきたのである。

5 歳児

豊寿園のお年寄りと交流のあと子どもたちのどこが自分たちと違うか聞いてみました。

- ・手がかさかさ ・白髪 ・歯がピカピカ
- ・声が低い ・めがねをかけていた
- ・顔がぼろぼろでかわいそうだった
- ・足がわるい（足置きがあった）
- ・歯がずれていた ・歯が抜けていた
- ・握手をしてもらって嬉しかった
- ・目が違ったと言いながら目じりを手で下げていた
- ・会えて嬉しくって泣いていた

〈考察〉

自分たちとどこが違うかを考えられたので、次に何をしてあげたらお年寄りが喜ぶかを考えてみました。

「助けてあげる」といいながら両手を差し出してささえてあげる格好をしていた

「大丈夫」と声をかけてあげる

「足を取り替えてあげる」

自分たちに何ができるか5歳児なりの答えだっ

たような気がします。あまりお年寄りとの関わりが少ない子どもたちにはこの答えが精一杯だったようです。関わることで何ができるかを考えられるのではないのでしょうか。それは異年齢交流や統合保育の中で子どもたちは学んでいます。いかに学ぶ経験を保育士が環境として提供するかであることに改めてこの事例から学びました。

この事例を読んで、私は気持ちが暗くなってしまった。「年をとることがいけないことである」という言葉が並んでいたからである。もしこの時に、「自分たちとどこが同じだったか？」と聞いたとするなら、子どもたちの答えは違っていたものになっていたはずである。

「僕たちと同じように歌を楽しそうに歌っていたよ」

「友だちと仲良く話し合っていた」

などと、肯定的な答えが返ってきたはずである。保育士の一言が子どもの反応と、それに続く認識を変える力を持っていることが確認された事例であった。

第三章 子どもと一緒に“子どもの哀しみに共感する”ということ

1、友だちとの別れを通して...

次の事例は、K保育士が報告してくれたものである。

ひびきは2歳クラスから保育園に入って来た。気持ちの優しい、大人びた表情と口調のちょっとおしゃまな女の子である。3歳クラスの時のこと、新入園児の男の子に散歩の帰り道「私たち、いつ結婚する？」と聞いていて、驚いたことがあった。男の子とも女の子ともよく遊んでいた。けんかをしても「さっきはごめんね」と言えるカラッとしたところがあり、好かれていたのだと思う。私もそんなひびきはクラスの中でも存在感がある子だと思っていた。年長クラスになってすぐ母から「6月に引越しをするので保育園も変わることになる」と聞き残念な気持ちがしていた。

ひびきが保育園最後の日、クラスで“お別れ会”を行った。ひびきが喜ぶことを数日前からそれぞれのグループで企画、準備してきた。なぞなぞを出題するグループ、ネックレスを作ったグループ、お笑いをしたい！と言う子もいた。

それぞれの出し物が終わった後、ひびきを囲んで丸くなって座った。

「ひとりずつ、ひびきちゃんと握手してお別れを言おうね」

と私が言うのと順に前に出て「元気でね」と声を掛ける子がほとんどだった。全員が言い、会もそろそろ終わりになるうか...という頃、私の横に座っていた、たくやの様子がおかしい。両腕を前でくっつけて顔をその中にうずめていた。見ると、泣いていた。

「そうだよ、悲しいよね」

と肩を抱き、振り返るとひびきも泣きだした。

「いいよ、ひびきちゃん、泣きたいんだよね。泣いていいんだよ。今日は思いっきり泣こう！」

と、そう言う私も涙声になっていた。次の瞬間、「うあ～ん」とまわりの子もこらえきれずに一斉に泣き出した。大きな瞳をカッと開けて涙をぼろぼろ流す男の子。「あーん、あーん」と声をあげて泣きじゃくる女の子。痛くても、くやしくても泣いている所を今まで一度も見たことがないみのりも背中を向けて泣いていた。ゆうかはティッシュを持ってきて泣いている子に黙って配っている。泣きがなかなか治まらないので、

「みんな、ここ（胸）をなで下ろしてそろそろ涙を止めてごらん」

と言うと、

「さっき、先生は“思いっきり泣こう！”って言った～」

と、泣き声に混じり、何処からか声がする。

次の瞬間、子どもたちは泣きじゃくりながら「ひびきちゃん、忘れないから」「ひびきちゃん、また会おうね。」「ひびきちゃん元気でね。」と次々に言葉をかける。りえと、りょうたも

「学校に行っても忘れないよ」

「大人になっても忘れないから」

と、ひびきに近づき、思いを伝えている。こうきは

「つらい、つらい、お別れつらい...ひびきちゃんの笑顔が見たい...大人になっても忘れないから」と目を真っ赤にさせて、泣きじゃくっていた。

私は「そうだよ」「わかるよ」と慰めながら、この子どもたちの思いにのせた言葉と、表情を頭と心に刻んだ日だった。

【考察】

子どもたちにとって小さい頃から毎日一緒に遊んで来た友だちとの“別れ”は3歳児クラスの時に一度あった。その時はもちろん“お別れ”の意味もまだよく分からずにいたが、約一年三ヶ月経ち、年長クラスになり、感じる気持ちの成長に驚かされた日であった。

たくやは、会が進むにつれて言葉にできない悲しさが涙となって溢れ、それを気づかれない様にしていた。その姿にこらえきれずに泣くひびき。私も一緒に泣いてしまった。ほとんどの子はつられて泣いてしまったのかもしれないが、“別れのさみしさ”を共有し合う空間がそこに生まれた。一人ひとりの胸に湧いた“思いを伝えたい！”と言う気持ち、その時の言葉は、暖かく、優しく、切なく、誰のまねでもなく、言わされたものでもない。気持ちから湧き上がる言葉は生きている、と感じた。

こうきの「つらい、つらい、お別れつらい」との表現に、純粋な気持ちの表われを感じることができた。私は子どもたちに「お別れを言おう」と儀礼的に言ったことが恥ずかしくなる位、子どもたちの言葉は生きていると感じた。

ひびきは地方へ引っ越して行き、この先記憶としては段々薄らいで行くと思うが、友だちが自分の為に泣いてくれた...ということは心の底の深い部分に沈み、そして、ひびきの心の中核となっていくだろう。

ここ最近、保・幼・小の連携が言われている。連携し、子どもの成長を長いスタンスで見えていくことは、とても大切である。しかし、保育園が小学校の下請け的な形になっていることが多いように思える。「学校に入った時にきちんと座れる子どもに」「話の聞ける子どもに」といった小学校からの要求が出され、それを達成するために保育園がキュウキュウとする。そんな図式が多いように思うのである。しかし、私は保育園の中心課題は、「人間として生きて行く上で一番大切な喜怒哀楽のコアをつくる」ということではないかと考えている。

このひじりの事例の中に出てくる、こうたの「つらい、つらい…」という言葉の重さと、そのこうたの言葉に共感し、共に哀しみを共有している保育士の姿勢に私は胸を打たれる。子どもというのは、こうした哀しみを共有していく中で、育っていくのではないだろうか。人間の感情のコア（中心核）というものは、哀しみだけでなく、様々な喜怒哀楽の感情を保育士や仲間が共有していく中で育っていくのだと思うのである。保育園は、決して小学校の下請けではない。「人間として生きていく上で必要不可欠な感情のコアの部分をつくる大事な仕事をしている」という誇りを持って保育という仕事に取り組んでもらいたいと思った事例であった。

2、口頭詩の会に参加しての変化

K保育士は、学習会に参加してからの変化を次のようにまとめていた。

この口頭詩の会に参加してから、子どもたちの声を聞き取ろうと、いう意識が自分の中に強くなった。また同時に、自分の声かけによって、子どもたちから湧き出る言葉は変化をしていくことを感じ、記録にしてみると、「こう言えばよかった」「ここでこう言わなかったらどうなっていたか」と思い返すきっかけとなった。

増田先生と会の皆さんに記録を読んで頂き、そ

の中の、中心ではない子の小さい一言やしぐさのひとつからも深く読み取ってもらえたことは私の子どもへの見方を根底から変えていった。私たちはどうしても問題のある子や元気な子に目が行きがちになるが、その結果、陰に隠れていた子が自分の思いを聴いてもらってないまま小学校へ上がり、自分を見てもらいたいのが為に荒れる、と言う事例を聞く。私たちはすべての子どもたちのつづきも大切にしたいかなくてはならない。また、増田先生から自分の実践を整理して噛み砕いて頂くことで、そこから広がって見えて来るものや再確認に、「もっともっとアンテナを張りながら、柔軟な心で子どもたちの前に立たなくては」と思った。でも、やはり日々迷い、悩み、これでいいのか？と揺れる…。先生の「揺れ動いていい！そうして“機微”がわかってくる、成長させてもらえる」の言葉を頼りに、“泣いたり笑ったりを大切にする保育”“人ってステキと思えるクラス作り”を目指して行きたいと思う。

保育士の成長は、やはり子どもの事例を研究し、自分の言葉で考えていくことを通して達成されていくものである。そのことがよくわかるまとめなのではないだろうか。

第四章 「猫のウンチの実践」について

次の事例は、O保育士とS保育士のものである。

1、ねこのうんち part 1

ねこさん うんち しないでください いぬさん うんち しないでください
--

これは毎朝のように園庭のプランターにうんちをするねこに対してあさみちゃん書いた手紙です。その時の会話は、次のようなものです。

保育士：「どうして、いつもここにうんちするんだろうね？」

あさみ：「この辺にトイレがないからじゃない？」

保育士：「じゃあ、どうしたらしくなるかな？」

あさみ：「先生が、このプランターを家に持って

帰ってよ！」

保育士：「こんなに重い、持って帰れないよ。」

あさみ：「ちょっと待っていて！ 手紙書いてくるから」

...と保育室にい行き上記の手紙を書いてきたので、それを木に貼りました。

保育士：「これを読めば、うんち、しなくなるかな？」

あさみ：「でもねこは、字が読めないと思うなあ...」

...翌日はプランターにはうんちはなく、その横の地面にありました。真っ先に見に行き

あさみ：「あっ!! うんちしていない!! ねこがみたんだよ！」

と地面のうんちを見て

あさみ：「この中にしちやいけないからこっちにしたんだねー」

保育士：「ちゃんとねこが見たら、『字が書けないから見たよ』ってねこの手のハンコを押してくれるかもね」(跡でこっそり手型をつけておきました。)

その翌日も見に行き、

あさみ：「先生、今日もしていないよ、」

ねこがうんちをしないようにと手紙を書きながらも「でも、ねこは字が書けないとおもうなあ」と自信なさそうに言っていたあさみちゃん。翌日、プランターにうんちがないのを見たときは、本当に嬉しそうでした。

ねこは字が読めないだろう...という現実を知りながらも自分の手紙はちゃんと読んでくれたと信じ、喜ぶ姿が4歳児らしくなるとも可愛いと思いました。

研究会では

「ねこのうんちから話を広げ、自分のうんちはどうなっているか？食べ物と排泄物の関係や自分の身体に興味を持たせていったらどうだろうか？」といったアドバイスを頂きました。

「なるほど！」

と思いながらも、

「エッ？ねこのうんちから？どうやって広げているの...？」

という思いもありました。

2, ねこのうんち part 2

ねこへの貼り紙をしたことでプランターなどにフンをしない日が続いていた。しかしある日...

あさみ：「わーっ！ 大変！ 私がせっかく手紙を書いたのにうんちがしてある!!」

「先生、ハート形のうんちだよ~」(本当にハート形でした)

保育士：「本当にハートみたいだね、ハートをうんちで作れるなんてすごいなあ...。」

「ねこのうんちとみんなのうんちを比べるとどうだろうな？ 色とか臭いとかは？」

あさみ：「黄色いね」

ゆりえ：「ページュじゃない」

保育士：「みんなのは、何色なの？」

あさみ：「黒だよ」

なおと：「黒いよ。こんな色のうんちの人はいないよね~」

まさみ：「まさみのは、黒茶色でもっと太いよ」

保育士：「このねこのうんちは、いいうんちかなあ？」

なおと：「バナナうんちだからいいうんちだよ。ゲリしていたら、ゲリうんちでしょ」

保育士：「臭いはどうだろうね？」

はるな：「くっさ~い！」(本当に間近まで鼻を近づけて)

保育士：「ねこは、何食べたんだろうね？」

あさみ：「ハート形のオムライスじゃない」

ゆりえ：「カレーじゃない」

ひろと：「こんなにくさいからにんにくだよ！」

「にんにく食べた次の日はくさいんだよなあ」

はるな：「どんぐりくさいよ」

保育士：「みんなのもくさいの？」

なおと：「くさい日とくさくない日があるよ」

あさみ：「そうだよ、うんちが毎日出ないと硬くなってくさいし、すごく出るのも大変な

んだよ。でも毎日出るとやわらかいし、
あんまりくさくないよ」

保育士：「あさみちゃん、便秘性だったからよく
知っているよね」

～皆、ずっとうんちのそばから離れないので～

保育士：「このうんち、どうする？ 片付けてい
い？ 持って帰る？ 観察してこのまま
にしておく？ 集める？」

あさみとゆりえ

：「いいねー、集めようよ、パケツに入
れて混ぜてみようか」

（2人で盛り上がるが、バイ菌もたくさんな
ので処理し、またうんちをされないように、
はがれかけていた貼り紙を見えるように貼り
なおしました。）

この会話には6人の4・5歳児が参加していま
す。子どもは、よくうんちを見つけてきます。い
つもなら

「うわー！ また!! 汚いからどいて、どいて！」
と急いでうんちの始末をするところですが、ぐっ
とこらえて、

「皆のうんちと比べてどう？」

と問いかけてみました。

すると6人の4・5歳児が集まってきて、ねこ
のうんちを前に「うんち談義」が盛り上がったの
です。

ねこのうんちと自分のうんちを同じレベルで見
ている子どもたち…。誰からも「汚い」と言う言
葉は聴かれませんでした。子どもたちは私たち大
人が考えているほどうんちを汚いと思っていない
ようでした。

3, 研究会での話し合い

研究会でも「子どもとうんち」にまつわるエビ
ソードが次々と出され、改めて子どもにとってう
んちが特別な存在であることが共通認識になって
いった。

子どもたちは、本当に「うんち」や「おしっこ

が」の話が大好きである。それは、どうしてなの
だろうか？ これについて研究会では、

「うんちやおしっこは、自分の中から形を変えて
出てくるものであると同時に自分の分身のような
存在だから、子どもたちは、私たち大人に対して
もうんちやおしっこの話をしてくるが、それはそ
うした『自分の中から出てくる物も含めて認めて
くれる。』というメッセージが含まれているので
は？」

という話が出てきたのである。

「なるほど！」

と思うと共に、保育士が子どもの感覚に近づいて
いくことの大切さも話し合われた。もし part 1
の時にアドバイスがなかったら、あさみちゃんの
「うんちがしてある！」

と言っていたときに、この保育士は、

「うわぁ！ また、ねこのうんち？ 汚いからど
いてどいて!!」

と叫びながら慌ててうんちを始末していたのでは
ないだろうか。

第五章 “つぶやき”を集めた『りんごの木』か
らコメントを添えた『リスの木』への変
化を追って

～連絡帳をオープンにして保護者をつなげる
（ある親子の変化をみつめて）～

次の事例は、T保育士のものである。連絡帳を
通して保護者と見事につながっていった実践例で
ある。紹介したい。

1, はじめた理由

私が口頭詩研究会に通い出したとき、受け持っ
ていたのは1歳児クラスでした。1歳児クラスの
口頭詩と言っても言葉の出始める時期の1歳児ク
ラスで、集めるのは、なかなか大変です。そこで、
家庭と連携して子どもの発達を捉えようと、
連絡帳の活用を考えました。日々、子どもの姿を、
記録している連絡帳なら、よりさまざまな姿が浮
かび出てくると考えたからです。さらに子どもの

成長の喜びを、ほかの保護者に知らせることで、『これでいいんだ』『こんな方法もあったんだ』などと、安心感や自信をもってもらえるのではと思ったのです。

そこで、はじめに、クラス全員の連絡帳の中からそれぞれひとつのエピソードを選び、クラス便りとして発行しました。保護者には、4月の保護者会であらかじめ、言葉が出てきたら、連絡帳のエピソードをお便りに掲載しますねと、話して了解をもらっていました。

1歳児クラス便り「りすのおさんぽ8月号から」抜粋

言葉やしぐさが輝いています！

進級して4ヶ月。言葉が少しずつ増えて、一つ一つのしぐさにそれぞれの個性が光りました。～最近の連絡帳より～

- ・最近「おいで～」と言って手を引かれます。
- ・ままごとセットで「おりょうり」といいながら作ってくれました。
- ・TVをみていると、画面が高校野球に。「やだよ～！」と画面に向かって怒っていました。
- ・頭をぶつけて「いたい！」。母がいたいのか、自分のとんでけ～といったら、「あっちいった！」と言っています。

みなさんから、つぶやきを募集します！これはと思うつぶやきやしぐさをぜひ連絡帳にお知らせください！集まったら特集にしたいと思います。

2. クラス便り発行

この願いをもとに、T保育士は連絡帳の中から、一人につき、1エピソードを抜粋し、クラス便りの特集を発行していった。クラス便りの反応を楽しみにしていたが、特に連絡帳や保護者から何の反応もなかったそうである。連絡帳を熱心に育児日記にしているお母さん、連絡したいことのみ箇条書きで書いてくるお母さん、1週間に1・

2回、毎回「特に変わりありません、よろしくお願いします。」のみ記入のお母さんもいたそうである。

しかしその中で気がついたのが、自分の仕事の大変さや育児の不安を訴えてくる文章がたくさんあったことだった。そこから見えてきたのは、育児を一人で抱え込んでしまい、不安をなかなか解消できない、保護者の孤立化であった。

この時の研究会で私は、

「反応がないのはどうしてだろう？」

と聞いてみた。そして、クラス便りという媒体では一方通行になってしまうので、相互にやり取りするには担任からのコメントがあるとよいこと。

そのためには週1回2人分でもいいのでミニ便りを発行した方がよいのではないかと。ということアドバイスをした。

T保育士は、毎週のお便りは難しいと判断し、「壁新聞的に張り出したら、行きかえりに見てもらえるかなと考えた」のである。T保育士は、2歳児クラスにも声をかけ、日替わりボード掲示「りすの木、あひるの木」を作ることにしたのであった。

3. 「りすの木」と「あひるの木」の実践（高山さん家族の取り組み）

T保育士は、1歳児室と2歳児室の前にある食事室の一角の壁に大きな木を二枚張ることにした。そして、1歳児りす組のエピソードは「りすの木」に2歳児エピソードは「あひるの木」に書き、それぞれの木に掲示するという取り組みを始めた。担任からのコメントは青虫の形にして掲載した。

この時は、始めてすぐに連絡帳に変化が現れていったそうである。まずは、お母さんたちの文章の量が急に増えたことである。結局「りすの木」と「あひるの木」には書ききれなくなり、T保育士は大きな吹き出しを作って掲載するようにしていった。（写真1）

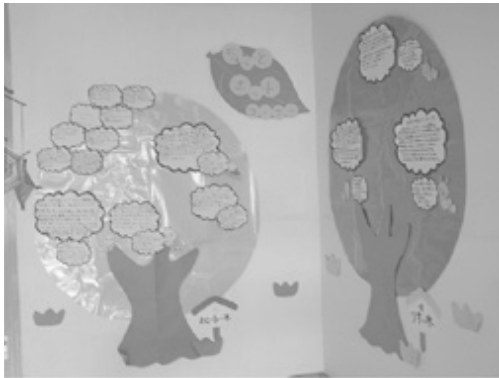


写真1 「りすの木」と「あひるの木」
(ちょっとホットコーナー)

ある日、たかやまゆうきくんのうちからこんなエピソードが届いた。

11月9日 たかやまさん

帰り道、「明日、おかあさん、ゆうきと遊ぼうかな～」と言うと、「あそばな～い」とゆうた。「え～あそばないの～？じゃあパパとあそぶ？」と聞くと「あそぶ～」とのこと。「ぼく会社いく～」のだそうです。いつの間に嫌われちゃったのでしょうか。

そこで、さっそくこのエピソードに、T保育士は次のようなコメントをつけて、「りすの木」に掲示をした。

(担任コメント)

イヤヨイヤヨも好きのうちっていうもんね。大好きなママに振り向いてほしいゆうきくん。かわいい!!

高山さんは夫婦ともに大企業に勤めており、なかなか育児の時間がとれず、育児ストレスを抱えていた。そのストレスを少しでも減らして欲しいと願ってのコメントであった。

4. 変わってきた連絡帳

T保育士が、「りすの木」を実践するに当たって、気をつけていったのは次の4点であった。

- ・必ず保護者の了解を事前に得ること。
- ・プライバシーを守ること。
- ・コメントは共感を基本に、同じ目線で一緒に

気付きを得られるものにすること。

- ・普段のコミュニケーションを大切にすること。

T保育士は、出来るだけ子どもの成長を捉えられた場面をピックアップすることを心がけていった。また、承諾を得る際、直接、エピソードについて共感し、保育士自身が嬉しかったことを伝えたそうである。最初は戸惑いも見られたが、徐々に子どもの姿を的確に捉えた書き込みが増えてきたのには当のT保育士も驚いたようであった。「りすの木」という共通の話題ができたことで、保護者と保育士のコミュニケーションの幅が広がっていったのである。

この段階で私は、

「担任のコメント力が成功する鍵です。」

と言ったあと、次の3つのアドバイスを伝えた。

自分(担任)の経験を溶かし込むこと。

(エピソードに対して、保育士自身の経験を披露することでより親近感がわく)

ただ、漠然と掲示するのではなく、共通の話題でくくる。

(悩んでいることや1歳児の成長について他の保護者も同じ気持ちなんだと安心感が出る)
保育士が質問や悩みに答えるのではなく保護者同士が互いに気付きあうように場を設定する。

(対保育士で終わらず、保護者同士悩みを解決しあう中で連帯感や一体感が生まれる)

最初に紹介したたかやまさんの連絡帳にも、だいぶ変化が見られるようになっていったそうである。この実践を始める前は、体調のことや仕事のことが主に書かれていたそうである。しかし、実践後は1日に2ページ近くぎっしりとゆうきくんのことで埋められてくるようになっていった。

2月1日 たかやまさん

〈特集私んちのトイレ事情あれこれ...〉より

この頃のゆうたはオムツの柄(?)にもこだわりをみせています。パンパースの「でんしゃ」の模様は好きなのですが、「カラオケ」

の模様だと「ちが～う～」といって拒否します。このままだとカラオケ模様のオムツばかり残ってしまいそうです。パジャマに着替えるのがなんともイヤな様で（自分で着るわけでもないのに）、今日も泣きながら、両手にコカコーラのミニカーを抱え、手洗い用のステップ[イラスト]の上に並べていました。泣いているのを放っておくとパジャマを持ってきて母の足にすがるのでした。

将来、おしゃれな男性になるかも！パパに似ているのかな。ママの足にしがめる姿も似てたりして…？

「こんなことをいったら保育士に注意されるのでは…？」とか、「こんなことで悩んでいるのはわたしだけかも…？」という不安が最初は見え隠れしていた連絡帳が、前向きな書き方に变化していき、読んでいてほほえましくなる姿が多く見られるようになっていったそうである。それは同時に、高山さん以外のお母さんたち（時にはおとうさんも！）のエピソードも内容が豊かになっていった。また、T保育士自身も、コメントを考えるのが楽しくなっていたそうである。

2月2日 たかやまさん

〈特集しつけ・躾・我が家のあの手この手〉より
オムツの柄…「カラオケ」を嫌がるので困ったぞと思っていましたが、“リスの木”にあったつぶきちゃんのエピソード（オムツにお名前を自分で書く）を思い出し、母もオムツに落書きをすることにしました。今日の落書きは車とわいもくん。[わいもくんのイラスト]それを見たゆうき。「これでいい。」だそうです。

リスの木を活用していただきありがとうございます。ゆうきくんの満足した顔が目に見えました。

りすの木を通して保護者同士が繋がりがあい、育児のヒントを得たり、これでいいんだと安心する姿がでてきている。また、エピソードにも父親の姿が見えるなど心のゆとりを感じられるのではないだろうか。

2月19日 たかやまさん

寝入りばな、ふと、「ママひげあるう～？」とゆうき。「ないよ～」と言うと「ぼくは～？」「ゆうきもないよ。つるつるだよ。」と言うと「パパだけ～？」と聞くので「そうだよーま先生もこーの先生もないね。」と言ったら「たかしゅぎせんせーあるよー。」と教えてくれました。帰宅すると靴をそろえ、パジャマの着替えも一人でやろうとする姿が見られるようになってきました。

ひげの科学!!ですね。役に立ててよかった。
(笑)寝る前っていろいろ考えているんだなあ。

5, この実践を通して感じたこと

1歳児のつぶやきやしぐさをじっくりと見て、保護者と成長の喜びや苦しみを共感できる場を作れたことは、結果的に保育の中の子どもの姿を深く捉えることに繋がっていったのではないだろうか。0・1・2歳児を育てる時期は、保護者も仕事のやりくりや手のかかる子育てに疲れを感じる時期と重なる。そのときに保育士としてどんなサポートが出来るか、悩みが尽きないのではないだろうか。今回の実践では、T保育士が保護者の子どもの見る目を信じ、丁寧に共感することで、本来なら誰もがもっているはずの「子育て力」を引き出すことにつながったと言えるのではないだろうか。

どの保護者も、育児に不安を抱えながらも、誰かと繋がりたい・共感したいと言う想いが強いと言うことが、改めて再認識された事例であった。

第六章 終わりに

1, 日誌を通して, 保育実践の質を変える!

これらの記録は, 「“口頭詩”と子どもの発達研究会」が進めてきた研究のごく一部を抜粋したものである。研究会の一番最初は, 子どもが言った言葉をひろってきてそれを読みあい,

「おもしろかったね!」

「子どもって, ユニークだよ!」

といった形であった。つまり, ただ単に子どもの言葉や様子を書きとめた記録にすぎなかったのである。

しかし, 実践の内容を検討しあっていくうちに, 子どもの言葉を聴き取ることが保育の質を変えていくことに少しずつ気がついていった。それは同時に, メンバーの意識自体を変化させていくことにもつながっていった。

口頭詩は, まずは子どもの言葉を聴き取り, メモをとることから始まる。メモをとることを通して, 保育の内容を振り返ることができるからである。I 保育士は,

「つぶやきシリーズを出して, 親が喜んでくれたことが嬉しかった。」

と研究会で述べていた。

K 保育士は,

「“泣いたり笑ったりを大切にする保育” “人ってステキと思えるクラス作り” を目指して行きたいと思う。」

と述べるようになっていった。

研究会のメンバーは, 口頭詩を聴き取ること自体が, 保育としっかり結びついていった。まさに「口頭詩 = 保育」という図式が出来上がっていったのである。

また, T 保育士の実践では, ふだんなら公開しない連絡帳というものを, 親の了解を得てオープンにしていく中で, 親同士のつながりを生んでいる。

私たちは, 保育の質を考えると同時に, 親同士がつながる方法を考えていく時期に来ているのではないだろうか。そうした中で, 私は一つの方法

を提起したいと思う。それは, 日々保育士が綴っている「保育日誌」の内容を変えていってみたいということである。「保育日誌」に, 保育園の中であった事実を書いていくというだけでは, もったいないように思うのである。「保育日誌」を書く時間は, だいたい 30 分ぐらいあると聞いている。その 30 分を, 子どもたちと過ごした保育の内容を振り返る「気づきの時間」にして欲しいと思うのである。ある瞬間の子どもの動きやつぶやきを「保育日誌」に書き留め, 「そのことの事実をどうとらえ・どのように返したか?」「どのように返したら, もっと良かったか?」「その事実の裏側にある子どもの本当の思いや願いは何か?」ということを考える時間にして欲しいと思うのである。たったの 30 分かもしれないが, そのことが「次の保育をより充実したものにしていける時間」になるに違いない。

2, ヘルプを言える子を育てる

私が少し前に 1 年生のクラスを受け持ったときのことである。小学校一年生の 5 月末にテストをした。すると算数のテストである子が 80 点をとったのである。その子は突然ワァッとわめいて教室から飛び出していった。私はどうしたのかわからなくて追いかけていった。すると, 屋上へ続く外階段をドーンと走っていき, 4 階から飛び降りようとしたのである。「どうしたの? やめろよ」と止めると, 「先生, 僕はだめなんだよ!」と言うのである。何がだめなのかと聞いてみると, 「僕は 80 点じゃだめなんだ。100 点じゃなきゃだめなんだ」と言うのだ。その子は, 100 点じゃなきゃだめなんだというメッセージ, できる子でなきゃいけないというメッセージをものすごく強く受けている子どもだったのである。そういう子どもたちを見たときに私たちは, 子どもたちが抱えているストレスや問題行動, 心のなかに抱えているいろいろな思いを吐き出させていながら, 「ヘルプ(助けて)」と言える子どもにしていかなければいけないと思うのである。保育園で一番大

事なポイントは、「私はつらいんだよ」「僕はイヤなんだよ」というようにヘルプとか助けてと言え
る力をつけていくことだと思うのである。

ところが日本の社会は、しっかりした子がいい
子であり、がんばっちゃうのがいい子であるとい
う価値観がものすごく強い。そのため、「僕はつ
らいんだよ」とか「悲しいんだよ」とか、「助け
て」とか「手を貸して」ということがなかなか言
えないのである。だからこそスキルとして保育園
のうちからきちんと身につけて欲しいと思っ
ている。じつはそのことが、小学校に入ってから
の問題行動を少なくするための大きな力になるの
である。

3、父母の心をフォローする必要性

6年生を担当した6月にあるお母さんが相談に
きた。そのお母さんは旦那さんのご両親と同居し
ていて、小さいとき（保育園や幼稚園の時代）か
ら子どもを育てていないのである。というのは、
お舅さんとお姑さんが子育てにものすごく口を出
してきたので、めんどくさくてイヤになってしまっ
た。そして子どもをおじいちゃんおばあちゃん、
保育園に預けてフルタイムで働くことにしたとい
うのである。ところが

「それが私にとってものすごくストレスなのです。
私には子どもを育てたかったのに育てられなかつ
たことに負い目があって、ときどき叫び出したく
なるのです。たまにお父さんやお母さんに対して
ものすごく叫び出したくなり怒鳴ったりするので
す。先生、どうしたらいいでしょう」

という相談を受けたのです。その時の私は、すご
い勝負だったのですが「首をしめちゃえば」と言っ
たのである。舅、姑の問題はそのくらいに悩むの
である。もちろん本当に首をしめろと言ったので
はないだが、そう言ったときそのお母さんは、私
の目の前で突然ワッと泣き出した。そして
「そんなに私の気持ちにピッタリくる言葉を言っ
てくれた先生は初めてです」と…。

「今までも他の先生に相談してきましたがそのた

びに、『大変ですね』『ご苦労様です』とか『人生
いろいろありますね』とおざなりな言葉しか言わ
れたことがなかった。初めて私の気持ちにびった
りの言葉を言ってもらって私はとてもうれしかつ
た。私の苦しさをわかってくれましたね」

と言って、涙をボロボロ流しながらそのあとのつ
らい気持ちを二時間ほどしゃべって帰っていった
のである。それ以来ときどき来て私とお話してい
く。そうすることで、同時に子どもも落ち着いて
いったのです。

そういう意味では、お父さんやお母さんも含め
て私たちがどのような言葉かけをするのか、フォ
ローしていくのがとても大事な時代になってき
ているのである。おざなりな言葉ではなく、本当
にお父さんやお母さんの苦しみや悲しみ、辛さに
どれだけ私たちが共感した言葉をかけてあげられ
るかが一つの勝負になってきていると言えるので
はないだろうか。そここのところがちょっとすれ違っ
てしまうために、私たちはなかなか親とつながり
あえない部分がでてきているのではないかと思う
のである。

4、保育園と小学校のつながりを考える

今の子どもたちは条件付き愛情のなかで生きて
いる。たとえば、“足の速いあなたが好きよ”と
か“勉強のできるあなたが好きよ”“図画工作の
上手なあなたが好きよ”というかたちで、何かし
らの条件をつけて子どもたちを好きになっている。
そんな条件をつける親が多いのである。ところが
条件付きの愛で生きている子どもたちは、勉強が
できなくなったら見捨てられるのではないかとか、
足が遅くなったら見捨てられるのではないかと思っ
てしまうのである。つまり、条件付きの愛は見捨
てられ感と表裏一体の関係になっている。そのた
めに、条件付きの愛のなかで生きている子どもは
自己肯定感が持てなくて、自己承認を求めながら
さまよってしまうのである。

しかしそういう状況のなかでも、話を聞いても
らっている子や話をするのが楽しいと感じている

子は、学校へ入っても大丈夫なのである。話し言葉と書き言葉でいうと、保育園でペラペラしゃべるのだけ小学校に入って作文を書けない子はいっぱいいる。保育園や幼稚園で一生懸命に字を教えれば書き言葉にスムーズに移行できるかという、そんなことはないのではないかと思っている。調査結果によると、幼稚園で一生懸命に字を教えても小学校に入って半年くらいするとその学力差はほとんど埋まってしまって、教えている子と教えていない子はほとんど一緒になるそうである。ところが伝えることは楽しいと知っている子は、必ず話し言葉から書き言葉にスムーズに入っていくことができるのである。伝えたりすることは楽しいし、相手にちゃんと伝えることはとてもおもしろいことなんだということを体得している子は、スムーズに書き言葉の中に入っていくことができるのである。やはり、聞き取られる経験が情緒と自己肯定感を育てていくことにつながるのではないだろうか。

5、子ども同士をつなげる

コミュニケーションの主体者は聞き手である。じつは人というのは、相手（聞き手）から出されるたくさんの反応を見て話をしているのである。それは、子どもたちも同様である。ところが表情や目の動き、口の動きなど聞き手から出されるたくさんの情報を処理する能力がないために、今の子どもたちはコミュニケーションがとれないのである。ようするに、相手から出されるコミュニケーションのシグナルをちゃんと読みとれる能力をつけていかないとけないということなのである。そのためにも子どもたちのつづやきをその子だけで終わらせるのではなく、他の子につなげていくという工夫が私たちには必要なのだ。

6、子どもはみんな“不思議の国のアリス”

次の記録は、5歳児の口頭詩である。

『排水口のかたつむり』（5歳児）

ひろのぶが見つけたかたつむりを排水口に落と

してしまったゆうに対して／ひろのぶ（泣きながら）「かたつむりさん、かわいそう！ちゃんとあやまりなさいよ！」／ゆう（ひろのぶに向かって）「ごめんなさい」／ひろのぶ「ちゃんとかたつむりさんにもあやまりなさいよ」／ゆう（排水口に向かって）「ごめんなさい」／みんなで排水口に手を突っ込み、砂をかき出すが見つけない／ひろのぶ「どうしよう。そうだ！てんとう虫さんに助けてもらおう」／ゆう「てんとう虫じゃ助けられないよ」／ひろのぶ「てんとう虫さん、ブーンって飛んできて、この中に入って助けてください。てんとう虫さ～ん」／保育者も一緒に叫ぶと、まわりの子も「てんとう虫さ～ん」と呼ぶ

そのところでこのことは一度終わるわけである。しかし、終わった後翌日になって保育士が「あのかたつむり、どうしたのかな？」と聞いてみたのである。そうするとゆり子ちゃんが、「たぶんみんながいない間にどこかへ行ったと思う」／保育士「どこかってどこ？」／ゆり子「ママを探して家に帰ったんじゃない？」／ひろのぶ「えっ、ほんと？ また探したい」

こうなっているのである。五歳児の特徴は、物語・ファンタジーの世界をつくり出していけることと、かたつむりが水道で流れてしまったという悲劇を悲劇で終わらせず、別の結末をつくり出して悲劇でないものに作り替えていくことができるということではないだろうか。私は、子どもは『不思議の国のアリス』だと思っている。『不思議の国のアリス』とはご存じのように、アリスが穴に落ちているんな冒険をして最後には元に戻り、夢がさめたという話である。子どもはそうに次々と物語を作りだしていく『不思議の国のアリス』なのではないかと思うのである。保育園の口頭詩にこんなものがある。

M男「先生の家、どこにあるの？」／保育士「電車に乗って行くとあるんだよ」／M男「どーやって行くの？」／保育士「あのね、電車に乗って行っ

て、降りたら前の道をまっすぐ行って右に曲がって信号渡って、左の坂道を登っていったところだよ」/ M美「あー知ってる知ってる。赤い屋根の家だよ」/ M男「おれも知ってる。白い壁の家だよ」/ 保育士「へー、いつ来たの？」/ A美「あたしも行ったよ。先生いるとき。だって洗濯物干してあったよ」/ M美「そうそうお布団干して干してあったよ」/ 保育士「えーっ、みんな来てたんだ」/ M男「うん、そうだよなあ」/ みんな「うん！」

これは、全部がファンタジーである。でもそこで保育士と子どもが楽しんでいるのである。子どもたちがいろんなことを言ってファンタジーを楽しむ会話をする。そうするとファンタジーにあふれた話や友だち・先生といろんな話をして楽しかったよ、という思いを心の風呂敷のなかに包み込む。そして包み込んだ風呂敷をもって家に帰るのである。それから子どもは家でお母さんに心のなかの風呂敷をひもといて、楽しかったことを話すのではないだろうか。そしたら親は「へー、そうなんだ。保育園は楽しいんだね」という形になるに違いない。「保育園って楽しいよ」「保育園で話すことって楽しいんだよ」という思いをおみやげにして子どもたちを帰してあげる。そうしたらきっとお母さんお父さんは、保育園にもっともっと目を向けてくれるのではないだろうか。

7. 保育（教育）の本質とは？

(1) 子どもの輝きを共有する

私の好きな詩人、竹中郁は次のような詩をうたっている。

もしも
もしも この地球の上に
子どもがいなかったら
おとなばかりで
としよりばかりで
おとなはみんなむっつりとなり
としよりはみんな泣き顔となり
地球はすっかり色をうしない

つまらぬ土くれとなるでしょう

子どもははとです。

子どもはアコーディオンです

こどもは金のゆびわです

とびます 歌います 光ります

地球を楽しくにぎやかに

いきいきとさせて

こどもは

とびます 歌います 光ります

こどもがいなかったら

地球はつまらない土くれです

（『子ども闘牛士』竹中郁少年詩集

「理論社」より）

子どもがいるから、私たちの世界は輝いて見えるのだと思うのである。そんな子どもの輝きを共有できる保育や教育の世界は、やっぱりステキだなと思えるのである。

(2) 人間としてのコアの部分をつくる

私が6年生を担任した時のことである。クラスの子どものお母さんが自殺をしてしまった。様々な理由からノイローゼになり、死を選んだのである。玄関を入ると居間があり、そこで自殺をしたのである。その第一発見者が、私のクラスの子どもであった。6年生にとってはあまりにも重すぎる事実であった。葬式の時、私は言葉をかけることができなかった。肩をとって、一緒に泣いてやることしかできなかったのである。そんなさけない自分に腹が立って仕方がなかった。

5年ほど前のことである。その子が中心となり、当時のクラスの仲間を20人近くも集めて、私を含めた同窓会を開いてくれた。その席で彼は、「先生と一緒に泣いてくれたこと、今でも覚えてるよ。あの時、自分自身が本当につらくて、僕も一緒に死んでしまおうかと思ったけど、先生と一緒に泣いてくれて、死ぬのをやめたんだ。先生、一緒に泣いてくれてありがとう。」

と声をかけてくれた。何も力になれず、ただ一緒に泣くことしかできなかったなさない私にしてくれた彼の言葉に、私は泣けて泣けて仕方がなかった。でも、一緒に泣いたことで、彼の苦しみが少しでも和らいたとするなら、それはそれで良かったのかもしれない。

そんな経験があるため、「命」や「別れ」についての子どもの詩や実践記録は、本当に私の胸をふるわせ、私の心を揺り動かさざるをえないのである。T保育士は、子どもとの別れの中で、一緒に泣いている。いや、泣くことしかできない自分がいるのである。子どもが泣き、保育士が泣く。その時、そこに感情が共有される空間が生まれるのである。私は、それでいいのではないかと思っている。一緒に泣くことで、子どもの哀しみが少しでも癒えたら、それで十分なのではないだろうか。そして、そうした経験が、実は人間としてのコアの部分を作っていくのである。

最後に、小学校4年生の詩を紹介したい。

自分

佐藤 由莉奈（4年）

失敗する自分はきらい。

自分の意見を言える自分は好き。

人にやつあたりする自分はきらい。

まだ自分のことを好きじゃないけど、

これからどんどん

自分を好きになっていくだろうな。

この詩に見られるように、人は自分を好きになりたりキライになったりしながら、ジグザグと成長していくものなのである。そうしたまわり道を保障しながらも、「自分のことが好き」ということもたちを育てていくことが、今とても大切なことなのだと思うのである。